戦績での強さからみたラグビー部の権限構造と集団魅力

丹羽 勲 昭¹⁾ 岡 仁 詩²⁾ 黒田 公子³⁾
 蔦 川 譲³⁾ 林 昌一郎⁴⁾

Authority-power structure and group attractiveness of rugby-football clubs from the viewpoints of strength in match

Takaaki Niwa¹, Hitoshi Oka², Tomoko Kuroda³,
 Yuzuru Tsutagawa³ and Shoichiro Hayashi⁴

Abstract

The purpose of this study is to examine Authority-Power Structure and Group-Attractiveness from the viewpoint of strength in match; to clarify what makes athletic clubs strong and to get materials to reinforce the Theory of Productivity-Attractiveness with. The subjects were 3,010 members of 100 Rugby-Football clubs from universities and colleges all over Japan. They were examined and checked by means of questionnaire and the following conclusions were reached.

1. As far as Authority-Power Structure is concerned, the stronger the Rugby-Football clubs are, the more clubs are of the outsider control pattern and of the outsider including oligarchy pattern. On the contrary, the weaker the clubs are, the more clubs are of the outsider excluding oligarchy pattern and of the membership pattern.

2. The stronger the Rugby-Football clubs are, the more members participated in athletic clubs in their junior and senior highschool days: their participation was for a longer term, their clubs were strong and many of them were captains. Especially, in their senior highschool days, many from the Rugby-Football clubs must have been excellent players.

3. The stronger the Rugby-Football clubs are, the more days are allotted to practicing and the more individual members show higher participation ratio. But, by bettering the system and method of practice, the days and the participation ratio could be a little less and lower.

4. Compared with about twenty years ago, the Rugby-Football club members today tend to show self-centered, individualistic way of thinking.

5. In order to strengthen the Rugby-Football clubs, the amount of practice matters, that is, in strained human relationship with excellent managers and coaches.

6. In the Rugby-Football clubs, too, strength of match and group attractiveness are closely related with each other. This affirms the Theory of Productivity-attractiveness.

7. The factors regulating the strength of the clubs were examined according to their Authority-Power Structure. Outsider Controlled Pattern: the attractiveness of the club's prestige is stronger than other factors. When people other than managers and coaches take

- 1) 奈良女子大学文学部
〒630 奈良市北魚屋西町
- 2) 同志社大学文学部
〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
- 3) 神戸市立看護短期大学
〒650 神戸市中央区港島中町
- 4) 同志社国際中・高等学校
〒610-03 京都府綴喜郡田辺町

1. Nara Woven's University Faculty of Letters, Kitauoya-Nishimachi, Nara (630)
2. Doshisha University Faculty of Letters, Tanabe-cho, Tsuzuki-gun, Kyoto-fu (610-03)
3. Kobe City College of Nursing, Minatojima Nakamachi Chuou-ku, Kobe (650)
4. Doshisha International Junior Senior High School, Tanabe-cho, Tsuzuki-gun, Kyoto-fu (610-03)

leader-ship, the clubs become weaker. Outsider Including Oligarchy Pattern: the attractiveness of the club's prestige is also stronger than other factors. Generally speaking, the captain's strong leadership with his performance function makes the club strong. Outsider Excluding Oligarchy Pattern: these data can not be clarified but if we presume to say, when the club is managed in the strained human relationship with the captain and the senior members at its top, the strength of the club increases.

Key words: authority-power structure, group attractiveness, rugby-football, strength in match

(Japan J. Phys. Educ., 37: 29—43, June, 1992.)

キーワード：権限構造，集団魅力，ラグビー部，試合での強さ

問 題

戦績をあげたい，強くなりたいという願いは，一般に運動部では共通の目標として結晶しており⁷⁾，そのために多くの方法が考えられてきた。いわゆる心・技・体といわれる領域とさらに集団の領域である。たとえば，1960年頃から選手の体力強化や技術向上のための科学的分析や方法の開発が相次ぎ，運動部（選手）の強化策に大きく貢献した。一方，peak performanceを得るための心理的側面の研究も，「あがり」や「集中力」の問題と関係して，1980年頃から科学的研究が行われるようになり^{5,6)}，最近では特にメンタルトレーニングやバイオフィードバックを用いるなど，多くの研究がなされるようになった^{4,14-17,21,23)}。いわゆる特定のスポーツ種目やスポーツ場面に対する心理適性の検討やそのトレーニングの研究である。

一方，集団という視点からの研究では，1955年頃からgroup dynamicsや小集団研究の影響を受けながら多くの研究が報告されるようになった⁸⁾。その後スポーツ界や学校体育における関心が体力問題に移行したこと等もあって，1970年代前半をピークに，減少傾向をたどっていたが¹³⁾，最近再び盛んになるきざしがみられるようになった^{1,2,18-20)}。そこでは，運動部集団一般の研究から，次第に運動種目毎の集団に焦点をあて，具体的にその実態や内容を検討する傾向がみられる。これは，具体的な個々の運動部を強くする方法をみつけないという切実な願いに基づくことによると共に，例えば個人種目

と集団種目では，集団の構造や機能の違いがみられることなどから，個々の種目に特徴的な集団のあり方を検討せざるを得なくなったという集団研究上の理由も含まれている。

さて，運動部の権限構造型については，すでに多くの報告が出されている^{7,8,11)}。それらの研究からは，本研究と真接関係する集団機能として，運動部の規範の決定権を，監督・コーチ，キャプテン，特定の有力な上級生，部員のうちの誰がもっているかということが，権限構造型を決めると共に，各権限構造型におけるそれらの人たちのリーダーシップの強さや部員に対する影響力をも決め，運動部の強さにも影響する重要な特徴となると考えられる。

次に，戦績での強さは集団凝集性や集団魅力とも密接に関係しているため，強さと関係した集団凝集性や集団魅力の研究も以前から行われてきた^{9,10,12,18,19)}。たとえば日本におけるスポーツ集団研究のうち，戦績での強さと関係したもので，阿江の研究^{1,2)}等，集団凝集性と関係していくつかのすぐれた報告がなされている。一方，集団魅力と関係して，丹羽¹⁰⁾は，部員が運動部における戦績や活動や人間関係，その他のいずれの次元であれ魅力をもった場合は，結局は成員を集団にとどめることになり，それらの魅力が乏しければ成員は犠牲を払うことを止め，集団を去ることになると考えた。そして成員が集団に止まるか離脱するかは，成員が集団に対して提供する労力の質と量（部活動）と，集団から受けるメリットの質と量（集団魅力）とのバランスシートの上にあると考えた。このgive and takeのバランスシートが集団の成立や維持・崩壊の重要な要因と考えて，部員を運動部

にひきつけ、止める働きをもつと考えられる集団魅力を5つの源泉からとらえた。そして運動部の集団魅力調査を作成し⁹⁾、運動部の集団魅力と凝集性やその他との関係について検討している。更にその集団魅力の調査を用い運動部の合宿による集団魅力の変化を追跡して検討し、集団魅力は運動部が強くなると高くなり、したがって強さと関係する権限構造とも密接に関係することを明らかにしはじめた¹²⁾。こうした一連の集団研究は、始めは、集団凝集性を高めることによって生産性も高まるとする凝集性-生産性理論を構築したが²²⁾、一方で、集団凝集性は集団魅力を核にして凝集し高まるので、凝集性と集団魅力とは密接に関係するとする凝集性-魅力理論を展開してきた¹⁰⁾。そしてそれらは、運動部集団研究を中心に、前述したように次第に、運動部が強くなること(生産性)によって集団魅力も高まり¹²⁾、さらに集団魅力の高まりは運動部を強くする要因になるのではないか¹⁸⁻²⁰⁾という生産性-魅力理論をも構築し始めたと考えられる。

しかし生産性-魅力理論を個々の運動部で証明しようとした研究はまだ極く僅かである。たとえば、バレーボール部を対象として、運動部が強くなると集団魅力も増すと研究がみられるが¹²⁾、集団魅力が増すと強くなるという実験的研究はまだみられない。ある種の集団魅力の増大は逆に戦績を低めることも考えられ^{18,20)}、その証明が困難であるということも関係しているのかも知れない。しかし、従来の研究^{12,18-20)}からは両者は相互依存関係にあると考える方が運動部の諸現象を解釈しやすいように思われる。したがって現在の研究も運動部の強さ(生産性)と魅力との相関をもとに両者の関係をさぐる努力を積み重ねる段階である。

我々は、先に人間関係からみたラグビー部の強さや権限構造について検討したが²⁰⁾、前述したような先行研究をうけて、本研究では、同じ大学のラグビー部を対象に、強さに影響する要因を探るため、戦績での強さを基準にして権限構造や集団魅力の状態等を検討したい。具体的

には、運動部の強さと、部の権限構造や集団魅力を、そして運動部員の練習参加率や過去の経験等との関係についても検討し、戦績で強い運動部の実態を分析し明らかにする。そして、できればラグビー部においても、戦績での強さに集団魅力の要因が大きく関わっていることを両者の相関という視点から検討し、生産性-魅力理論の妥当性を部分的にでも補強したいと考える。

方 法

対象：全国の大学ラグビーチーム100、部員3,010名(表1)。

手続：運動部の強さと権限構造や集団魅力等との関係を中心に検討するため、1988年7月から8月に質問紙法(無記名の匿名調査)で、運動部の権限構造調査や集団魅力調査等を監督やコーチを通じて配布し、回収した。

調査内容

(1) 運動部の構造・機能および部員の特性…丹羽⁷⁾の運動部員の調査を用いた。権限構造の判定は、①練習計画決定者と、②キャプテン選出方法の2通りでおこない、それぞれの決定権の所在から4類型に分類した。

(2) 運動部の集団魅力…丹羽⁹⁾の作成した52

表1. 強さ別対象

強 さ	5	4	3	2	計
チーム数	4	20	21	55	100
人 数	113	981	682	1,234	3,010

注) ↑ 強さの基準

5…大学選手権優勝可能

4…学生リーグ1部所属程度

3…学生リーグ2部所属程度

2…学生リーグ3部所属程度

1…学生リーグ4部所属程度以下

†† 強さの分類は、過去(約3年間)の成績をもとに、日本代表ラグビーチームの監督などの経験をもち、大学ラグビー部の現役部長でもある有識者とコーチ等3名によって行った。

††† 強さ1は、対象としたラグビー部にはいなかった。

表 2. 本研究に用いた要因・調査内容

要 因	調 査 内 容
1. 部の強さ	5, 4, 3, 2, 1 の段階別
2. 権限構造	部員外型, 部主脳型, 部員内主脳型, 部員型 (① 練習計画決定者から② キャプテン選出方法から)
3. 部員の役割	キャプテン, バイスキャプテン, マネージャー, 部員, その他
4. 部員の学年	4, 3, 2, 1
5. 練習日数	一週間の練習日数
6. 練習参加度	練習参加率 (個人参加率, 部員全体の参加率)
7. 運動部経験期間, 時期 強さ, 役割	運動部経験時期とその期間, 中学・高校・大学での種 目, 月数, 強さ, キャプテン経験の有無
8. 部内の人間関係	上級生と下級生間の服従度・親和度・尊敬度, キャプ テンと部員間の服従度・親和度・尊敬度
9. リーダーシップ型 (PM 式)	監督・コーチの P・M 得点, キャプテンの P・M 得点 キャプテンに準ずる人の P・M 得点
10. リーダーシップ型 (ER 式)	監督・コーチの E・R 得点, キャプテンの E・R 得点 キャプテンに準ずる人の E・R 得点
11. リーダーに希望する性質	ER 式リーダーの信頼性を基準にした 10 項目
12. 集団魅力	集団魅力得点 (運動部の魅力の 5 源泉ごと)

項目の運動部の集団魅力調査 (内的整合性信頼性 $r_{tt} = .910$) を用いた。集団魅力調査は, ①運動部における人間関係の魅力, ②運動部の活動の魅力, ③部員の個人的目標達成の媒体としての魅力, ④運動部のもつ威信の魅力, ⑤運動部の目標や課題の魅力, の 5 源泉について調査し, その総合から運動部の集団魅力を調べるものである。

(3) その他…本研究で用いた要因および調査内容は表 2 に示すとおりである。

結 果 と 考 察

I. 強さからみたラグビー部の権限構造

1. ラグビー部の強さと権限構造

各運動部の権限構造型は, 前述したように, ①キャプテンを選出する時に最終決定権をもっている人②練習計画を決める人, をそれぞれ基準として決定し, 分類された権限構造型別の対象を表 3 に示す。そして運動部の強さ別に各運動部の権限構造型を分け, その数を示したのが表 4 である。表 4 から強いラグビー部ほど, 概して部員外型, 部主脳型の構造をもつ部が多く, 部員内主脳型, 部員型では弱い部が多くなる傾向がみられ, 丹羽ら¹⁸⁾の研究と類似した傾向を

表 3. 権限構造型別対象

キャプテン 選出法による	部員 外型	部主脳 型	部員内 主脳型	部員型	計
チーム数	11	21	48	20	100
人 数	385	898	1,218	509	3,010
練習計画 決定者による	部員 外型	部主脳 型	部員内 主脳型	部員型	計
チーム数	12	25	63	0	100
人 数	440	1,041	1,529	0	3,010

示す。なお, 練習計画については, 部員全体の話し合いで決める部員型の部はなかった。このことは恐らく, 学生でしかもラグビーのようなチームプレーの運動部では, 専門的知識をもった監督・コーチ, またはキャプテンや上級生を中心とした, 高度で組織的な練習を展開することが必要となることを示しているのであろう。

2. ラグビー部の強さと部員の中学・高校での運動部経験

運動部の強さ別にみた部員の中学・高校時代の運動部経験を表 5 に示す。表 5 から, ラグビー部員の過去の経験をみると, 強い部ほど, 中学・高校での運動部経験者が多く, 運動部経験の期間も長い。また, 中学・高校で強い運動部に所

表4. 強さ別・権限構造型別対象

権限構造\強さ		5	4	3	2	計	
キャプテン選出法による	部員 外型	チーム数(%)	2(18)	6(55)	3(27)	0(0)	11(100)
		人 数(%)	48(12)	244(63)	93(24)	0(0)	385(100)
	部主脳 型	チーム数(%)	1(5)	8(38)	8(38)	4(19)	21(100)
		人 数(%)	42(5)	467(52)	287(32)	102(11)	898(100)
	部員内 主脳型	チーム数(%)	0(0)	5(10)	7(15)	36(75)	48(100)
		人 数(%)	0(0)	187(15)	224(18)	807(66)	1,218(100)
	部員型	チーム数(%)	1(5)	1(5)	3(15)	15(75)	20(100)
		人 数(%)	23(5)	83(16)	78(15)	325(64)	509(100)
	計	チーム数	4	20	21	55	100
		人 数	113	981	682	1,234	3,010
練習計画決定者による	部員 外型	チーム数(%)	1(8)	5(41)	3(25)	3(25)	12(100)
		人 数(%)	31(7)	254(58)	93(21)	62(14)	440(100)
	部主脳 型	チーム数(%)	3(12)	12(48)	8(32)	2(8)	25(100)
		人 数(%)	82(8)	624(60)	273(26)	62(6)	1,041(100)
	部員内 主脳型	チーム数(%)	0(0)	3(5)	10(16)	50(79)	63(100)
		人 数(%)	0(0)	103(7)	316(21)	1,110(73)	1,529(100)
	部員型	チーム数(%)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
		人 数(%)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	計	チーム数	4	20	21	55	100
		人 数	113	981	682	1,234	3,010

属し、キャプテンの経験者も多いことがわかる。(但し中学では有意差なし)。すなわち、強い部ほど中学・高校の経験からみて、優秀な選手の多いことが推測される。

また強さ別に、部員が中学・高校で経験した運動種目を分け、表6に示す。表6からみると、中学では、野球部、ラグビー部経験者が多く、高校ではラグビー部経験者が極めて多い。中学では、ラグビー部のない学校が多いことを考えると、中学での経験者が少ないことは当然であるが、大学のラグビー部員の多くは、高校から継続している選手が多く、しかも強い部ほど高校でのラグビー経験者の多い傾向がうかがわれる。こうした傾向は、他の運動部の場合でも同様にみられる¹⁸⁾。

3. ラグビー部の強さと部員の練習日数や練習参加率

部員のシーズン中の練習日数や、シーズン中の練習参加率を表7に示す。練習参加率で、「個

人」とは各運動部員自身の自己判断によるシーズン中の練習参加率についての回答を平均した値であり、「チーム」とは各運動部員が、シーズン中の自チーム全体の練習参加率について推定し、回答した値から算出したチーム(部員全体)の練習参加率(平均)のことである。

表7から、強い部ほどシーズン中の練習日が多く、練習参加率も高い傾向のあることがわかる。大学選手権で優勝の可能性が高い運動部(強さ5)では、1週間に6, 7日練習し、部員の練習参加率は約98%にも達することがわかる。こうした傾向は、他の運動部でも同様である¹⁸⁾。特異な例として、強さ5のD大学ラグビー部があるので、その例を表8に示す。強さ5はシニアチーム、強さ4はジュニアチームである。学部や教養・専門課程の授業の関係で練習に参加できない学生が出てくことや、体力づくりなどを個人練習でやり、全体の練習は必要最少限にして、合理的な練習をしたいとする部長・コー

表5. 強さ別にみた中学・高校での運動部経験

運動部経験		強さ	5	4	3	2	Schefféの法 による(p<.05)	
中 学	経 験	$\bar{X}$	1.95	1.94	1.90	1.85	5>2	
		SD	0.23	0.23	0.30	0.36	4>2	
		N	(113)	(978)	(681)	(1,233)	3>2	
	月 数	$\bar{X}$	33.38	32.72	32.45	31.49	5>2	
		SD	5.11	5.79	5.91	6.13	4>2	
		N	(102)	(867)	(603)	(1,005)	3>2	
	強 さ	$\bar{X}$	3.40	3.23	3.02	2.89	5>3	5>2
		SD	0.99	0.85	0.77	0.75	4>3	4>2
		N	(107)	(908)	(611)	(1,030)	3>2	
	キャプテン 経 験	$\bar{X}$	1.31	1.24	1.22	1.20		
		SD	0.46	0.43	0.41	0.40		
		N	(107)	(920)	(614)	(1,038)		
高 校	経 験	$\bar{X}$	1.99	1.98	1.94	1.84	5>2	
		SD	0.09	0.13	0.23	0.37	4>3	4>2
		N	(113)	(978)	(682)	(1,233)	3>2	
	月 数	$\bar{X}$	34.99	34.19	33.79	31.16	5>2	
		SD	3.44	4.40	4.60	6.44	4>2	
		N	(109)	(882)	(613)	(976)	3>2	
	強 さ	$\bar{X}$	3.92	3.83	3.51	3.16	5>3	5>2
		SD	0.91	0.85	0.92	0.73	4>3	4>2
		N	(112)	(957)	(642)	(1,029)	3>2	
	キャプテン 経 験	$\bar{X}$	1.31	1.23	1.19	1.18	5>3	5>2
		SD	0.47	0.42	0.39	0.38	4>2	
		N	(112)	(964)	(643)	(1,037)		

注) ↑ 経験 2…有 1…無

↑↑ 強さ 5…全国的な中学の大会・全国高校選手権で優勝可能

4…県で優勝可能

3…県で上位の強さ

2…県で普通の強さ

1…県で普通以下の強さ

↑↑↑ キャプテン経験 2…有 1…無

↑↑↑↑ 4つの強さの程度の平均値間の分散分析の結果, 有意差のあった項目について, Schefféの法³⁾を用いて平均値対間の検定をしている。

チ陣の考えから, 表8からも推察できるように, 個人練習を重視した練習法を採用している。しかも, 練習日数や練習参加率も他のラグビーチームと比較して低いが, 極めて強く, よい戦績を残している。これは, 練習日数等が少なくても, 選手自身の意識や練習の仕方等に特別の工夫やアイデアがあれば, すぐれた戦績をあげられるという, 一つの可能性を示す資料ではな

いかと考える。ちなみに, この部のキャプテンは全部員の選挙によって選出されている。

個人参加率やチーム参加率と強さとの関係を図1, 2に, また22年前(1966)の運動部(多項目)における練習参加率⁷⁾との比較をするための資料を図3に示す。

約20年前の運動部員と現在のラグビー部員の練習参加率への認知を比較すると, 約20年前

戦績での強さからラグビー部の権限構造と集団魅力

表 6. 強さ別にみた中学・高校で経験した運動種目

経験種目		強さ	5 N=107	4 N=925	3 N=615	2 N=1,045	計 N=2,692
中 学	ラグビー	N (%)	22 (20.6)	244 (26.4)	75 (12.2)	65 (6.2)	406 (15.1)
	野 球	N (%)	17 (15.9)	220 (23.8)	157 (25.5)	247 (23.6)	641 (23.8)
	そ の 他	N (%)	68 (63.6)	461 (49.8)	383 (62.3)	733 (70.1)	1,645 (61.1)
経験種目		強さ	5 N=112	4 N=964	3 N=643	2 N=1,037	計 N=2,756
高 校	ラグビー	N (%)	103 (92.0)	900 (93.4)	550 (85.5)	665 (64.1)	2,218 (80.5)
	そ の 他	N (%)	9 (8.0)	64 (6.6)	93 (14.5)	372 (35.9)	538 (19.5)

表 7. 強さ別にみた練習日数と練習参加率

練習		強さ	5	4	3	2	Scheffé の法 による (p<.05)	
日 数	$\bar{X}$		4.99	4.94	4.85	4.65	5>3	5>2
	SD		0.11	0.24	0.36	0.52	4>3	4>2
	N		(90)	(898)	(682)	(1,234)	3>2	
参 個 人	$\bar{X}$		97.92	96.65	94.97	92.88	5>2	
	SD		4.93	8.74	10.70	13.37	4>3	4>2
	N		(90)	(889)	(676)	(1,223)	3>2	
加 率 チーム	$\bar{X}$		92.98	93.11	89.00	87.57	5>3	5>2
	SD		8.09	9.18	11.15	11.95	4>3	4>2
	N		(88)	(879)	(673)	(1,219)		

注) ↑ 練習日数 5…週 6, 7 日
 4…週 4, 5 日
 3…週 2, 3 日
 2…週 1 日

↑ 4つの強さの程度の平均値間の分散分析の結果、有意差のあった項目について、Scheffé の法³⁾を用いて平均値対間の検定をしている。

は個人より全体の参加率が高いと認知する人が多かったが、現在では、反対に個人の参加率が高いと認知する人が多くなり、個人中心の行動や認知の傾向が強くなっているのではないかと考えられる。現在のラグビー部以外の運動部員の調査でも同様に個人中心の傾向が強くと認められており¹⁰⁾、こうした傾向は、時代の流れを反映しているのかも知れない。

4. ラグビー部の強さと集団魅力

強さ別にみた集団魅力得点を表 9 に示す。表 9 から、集団魅力の総合得点 (A 1) は概して強い部ほど高い。これは、他の運動部でも同様に認められている傾向である^{10,12,18,20)}。魅力の 5 源泉についてみると、強い部ほど「運動部のもつ威信の魅力」(A 5)が高く、「運動部の目標や課題の魅力」(A 6)も高い傾向がみられる。これ

表 8. D大学の練習日数と練習参加率

練習\強さ		5	4
日数	$\bar{X}$	4.83	4.84
	SD	0.39	0.37
	N	(23)	(83)
参個人	$\bar{X}$	88.91	84.41
	SD	13.62	17.33
	N	(23)	(82)
率チーム	$\bar{X}$	64.57	66.96
	SD	12.33	10.51
	N	(23)	(79)

注) 練習日数 5…週 6, 7 日

4…週 4, 5 日

図 1. ラグビー部98チームの試合における強さの強度と自己判断による練習への参加率

らの魅力の源泉は、強い部であることによって高まる内容であるとも考えられる。しかし、「部が行う活動の魅力」(A 3, t検定で $5 > 3$, $p < .05$) や「部員の個人的目標達成の媒体としての魅力」(A 4, t検定で $5 > 4$, $p < .05$, $5 > 2$, $p < .01$) は、非常に強い部では高いが、その他の運動部では、強さとの関係は、それほど密接ではない。例えば有名選手や有名チームの選手

図 2. D大学の試合における強さの程度と自己判断による練習への参加率

の就職等での有利さを考えると、強い部では、他の目標、例えば就職などで有利になるための手段としてのメリットを享受できる可能性の高いことが考えられるが、弱い部ではその可能性が低い。したがって、この魅力 (A 3, A 4) の源泉も、強い部のみに有利に働くのではないかと推測される。

すなわち、魅力の各源泉とも全国制覇の可能性のあるような強い部 (生産性の高い部) では、最も高い魅力を備えており、そのため多くの部員が集まり、ますます運動部の生産性も高く (戦績で強く) なるという相互依存関係が、強さと集団魅力の間に成立していると考えられる。但し、人間関係の魅力 (A 2) は、強さ 5 を除くと、むしろ弱い部では、親和的雰囲気と比較的多いため、一般的に人間関係に魅力をもちやすいのであろう。

以上のことから、戦績で強いことが集団魅力を高める重要な要因であり、集団魅力が高ければ優秀選手も大勢集まりやすく、さらにラグビー部を強くするという関係が成立するのではないかと推察される。また、後述する重回帰分

図3. 1966年の試合における強さの程度と自己判断による練習への参加率

表9. 強さ別にみた集団魅力得点

集団魅力	強さ	5	4	3	2	Schefféの法による ($p < .05$)		
		N=113	N=967	N=680	N=1,222			
A 1	$\bar{X}$	88.38	83.49	80.79	80.25	5>4	5>3	5>2
	SD	13.83	17.96	17.60	16.48	4>3	4>2	
A 2	$\bar{X}$	1.76	1.66	1.68	1.71	5>4		
	SD	0.29	0.37	0.35	0.32	4<2		
A 3	$\bar{X}$	1.73	1.68	1.65	1.68			
	SD	0.30	0.36	0.38	0.34			
A 4	$\bar{X}$	1.64	1.57	1.58	1.55			
	SD	0.29	0.38	0.36	0.36			
A 5	$\bar{X}$	1.70	1.45	1.09	0.96	5>4	5>3	5>2
	SD	0.28	0.46	0.53	0.52	4>3	4>2	3>2
A 6	$\bar{X}$	1.58	1.57	1.49	1.47	4>3	4>2	
	SD	0.49	0.50	0.50	0.48			

注) †A 1…集団魅力得点

A 2…運動部における人間関係の魅力

A 3…運動部がおこなう活動の魅力

A 4…部員の個人的目標達成の媒体としての魅力

A 5…運動部のもつ威信の魅力

A 6…運動部の目標や課題の魅力

†† 4つの強さの程度の平均値間の分散分析の結果、有意差のあった項目について、Schefféの法³⁾を用いて平均値対間の検定をしている。

表 10. 運動部の強さに影響する要因の重回帰分析

順位	要 因	単相関	標準偏 回帰係数	規定率
1	練習計画決定者	-.62	-.411	14.79
2	運動部のもつ威信の魅力	.42	.279	10.07
3	キャプテンのM機能	-.18	-.176	6.35
4	高校で所属した運動部の強さ	.33	.137	4.94
5	高校での運動部経験の有無	.22	.107	3.85
6	キャプテンと部員の親しさの程度	-.24	-.103	3.69
7	部員がキャプテンを尊敬する程度	.06	.098	3.54
8	部員の個人的目標達成の媒体としての魅力	.03	.086	3.09
9	一週間の練習日数	.29	.080	2.88
10	キャプテンに準ずる人のE機能	.02	.080	2.88
11	監督・コーチの技術指導P機能	-.04	-.072	2.59
12	監督・コーチのE機能	-.03	-.069	2.49
13	キャプテンに準ずる人のR機能	-.03	-.065	2.34
14	高校でのキャプテンの経験	.07	.045	1.61
全(65)要因の決定係数		.585		

注) 規定率 = $\frac{\text{各々の標準偏回帰係数}}{\text{標準偏回帰係数の絶対値の総和}} \times 100$

析的検討においても集団魅力(特に威信の魅力)の高さが部の強さを規定する重要な条件であるとの結果が得られており、本研究でも生産性一魅力理論を支持する結果が得られたと考えてよいであろう。

5. ラグビー部の強さに影響する要因の重回帰分析的検討

戦績での強さに影響する要因は、かなり多くのものが考えられるので、これらの要因を変量として扱い、多変量解析の手法で、強さを予測する要因を見つけ出したいと考える。そしてその予測式から逆に、強さを規定する(影響する)要因を見つけ出したいのである。つまり、目的変量(強さ)を予測できる要因がわかるということは、それを規定する(影響する)要因がわかるということも意味している。そうした予測式を統計的に導出する多変量解析の手法としてよく用いられるのが重回帰分析である。

そこで、ラグビー部の強さに影響する要因をみるため、ラグビー部の戦績における強さ(表1の注に基準を示す)を目的変量にし、表2に示した調査の全項目(人間関係、リーダーシップ、集団魅力も加える)を説明変量として、ス

トップワイズの変数追加法により重回帰分析をした結果を表10に示す。表10から、全65要因で、ラグビー部の強さについて全分散の約59%を説明できることがわかる。そして、ラグビー部の強さに最も大きく影響している要因は、練習計画決定者であり、ついで運動部のもつ威信の魅力である。つまり、専門的知識とすぐれた指導力をもつ監督・コーチが組織的に練習を展開する部が強くなり、また、部の強さ(生産性)が部員の威信につながるような雰囲気や、できればそれが伝統をつくるような状態をつくることが、ラグビー部を強くする大きな要因と考えられる。また、高校で強い運動部に所属した部員が多く、部員から尊敬されるようなキャプテンがいることや、練習日数の多さなどが考えられる。反対に、キャプテンのM(集団維持)機能やキャプテンと部員が親しいことは、一に作用している。こうしたことは、権限構造によっても異なるが、概していうなら、ラグビー部ではすぐれた監督・コーチを中心に、緊張した人間関係のもとで、優秀な選手に対して多くの練習を重ねることが、強くなる条件ではないかと考えられる。しかし、こうした条件は権限構造

表 11. 部員外型における部の強さに影響する要因の重回帰分析（練習計画決定者を基準にして）

順位	要 因	単相関	標準偏 回帰係数	規定率
1	運動部のもつ威信の魅力	.42	.524	7.51
2	キャプテンに準ずる人の技術指導 P 機能	-.16	-.484	6.93
3	キャプテンの E 機能	-.10	-.420	6.01
4	キャプテンに準ずる人の E 機能	-.12	-.410	5.87
5	キャプテンの技術指導 P 機能	-.15	-.390	5.59
6	キャプテンの R 機能	-.08	-.348	4.98
7	キャプテンに準ずる人の圧力 P 機能	-.08	-.310	4.44
8	キャプテンの圧力 P 機能	-.14	-.290	4.15
9	監督・コーチの R 機能	-.18	-.238	3.41
10	部員の個人的目標達成の媒体としての魅力	-.00	-.195	2.79
11	高校で所属した運動部の強さ	.18	.182	2.61
12	学年	.06	.165	2.37
13	上級生と下級生の親しさの程度	-.17	-.163	2.33
14	キャプテンに準ずる人の R 機能	-.15	-.154	2.21
全 (63) 要因の決定係数		.497		

によって異なると考えられるので、次にそのことについて検討する。

6. 権限構造別にみたラグビー部の強さに影響する要因の重回帰分析的検討

各権限構造型におけるラグビー部の強さに影響する要因や、その内容について検討するため、各権限構造別に、戦績における強さを目的変量とし、表 2 に示した調査の全項目（65 要因）を説明変量とする重回帰分析を行った結果を、権限構造別に表 11、表 13、14 に示す。

1) 部員外型：表 11 から 63 要因で全分散の約 50%を説明していることがわかる。部員外型のラグビー部で強さに最も大きく関係している要因は、運動部のもつ威信の魅力である。この型には、全国大学選手権で優勝可能なチームが多く含まれていることを考えれば、強さと伝統を誇るラグビー部の威信の魅力が強さと最も強く関係することは理解できる。また前述した生産性－魅力理論を支持する結果にもなっている。ついで、マイナスに働く要因としてキャプテンに準ずる人の技術指導 P 機能^{※1)}、キャプテンやキャプテンに準ずる人の専門性 (E) 機能、キャプテンの技術指導 P 機能等が続いている。

こうしてみると、監督・コーチ等部員外者が強い権限を持っている部では、キャプテンやキャプテンに準ずる人が、指導性を発揮することは、むしろマイナスに働くことがわかる。また監督・コーチであっても、人格的尊敬といった (R) 機能はマイナスに働くことがわかる。なお順位が低いため表 11 には示していないが、監督・コーチの圧力 P 機能や技術指導 P 機能が低い値で、しかもマイナスにできたことは、従来の運動部集団一般の結果とは明らかに異なっている。そこで、少し詳細に検討するため、表 12 から部員外型の監督・コーチの技術指導 P 機能や圧力 P 機能の強さ別比較をみると、両機能は概して弱い部ほど強くなっている。こうした傾向は、従来の資料からみる限り、男子のラグビー部の部員外型における監督・コーチのリーダーシップの特徴と考えられる。すなわち、弱い部では、監督・コーチが圧力 P 機能や技術指導 P 機能を強くもって指導する必要があるが、強い部では、選手たちが自分たちの判断で練習する力をもっているため、比較的自分たちで練習しやすいのではなかろうか。あるいは、こうした傾向は、たとえば試合中、監督・コーチは選手

表 12. 部員外型における P (集団目標達成) と M (集団維持) 機能 (強さ別)

P・M 機能		強さ	5	4	3	2	Scheffé の法 による (p<.05)
監督	技術指導 P	$\bar{X}$	3.97	3.69	4.01	4.35	4<2
		SD	0.67	0.85	0.76	0.47	3<2
		N	(29)	(246)	(93)	(50)	
	圧力 P	$\bar{X}$	3.63	4.08	4.11	4.30	5<4
		SD	0.66	0.68	0.66	0.54	5<3
		N	(30)	(244)	(91)	(50)	5<2
	集団維持	$\bar{X}$	3.46	3.21	3.64	3.44	
		SD	0.66	0.93	0.91	0.74	4<3
		N	(30)	(244)	(90)	(49)	
キャプテン	技術指導 P	$\bar{X}$	3.63	3.77	3.96	4.02	
		SD	0.77	0.73	0.73	0.66	
		N	(28)	(238)	(89)	(48)	
	圧力 P	$\bar{X}$	3.41	3.79	3.96	3.85	5<4
		SD	0.61	0.66	0.63	0.61	5<3
		N	(29)	(237)	(89)	(49)	5<2
	集団維持	$\bar{X}$	3.44	3.60	3.81	3.71	
		SD	0.65	0.71	0.80	0.68	
		N	(29)	(236)	(88)	(48)	
キャプテンに準ずる人	技術指導 P	$\bar{X}$	3.69	3.60	3.85	3.98	
		SD	0.82	0.74	0.74	0.69	4<2
		N	(26)	(193)	(72)	(42)	
	圧力 P	$\bar{X}$	3.53	3.65	3.79	3.72	
		SD	0.66	0.71	0.66	0.68	
		N	(27)	(196)	(74)	(44)	
	集団維持	$\bar{X}$	3.56	3.43	3.73	3.72	
		SD	0.64	0.74	0.80	0.66	4<3
		N	(27)	(197)	(74)	(44)	

注) 4つの強さの程度の平均値間の分散分析の結果、有意差のあった項目について、Scheffé の法³⁾を用いて平均値対間の検定をしている。

に指示を与えたり、メンバーチェンジをすることができず、選手の自立的判断のもとに競技を進めるなど、英国系スポーツの文化的特徴をもつスポーツに特徴的にみられることかもしれないが、この点は課題として残しておきたい。

2) 部主脳型：表 13 から、部の強さと最も強く関係する要因は、部員外型と同様に運動部のもつ威信の魅力である。表 4 から、部主脳型にもかなり強い運動部が多いことから、部員外型と似た状態であると考えられる。そして、キャプテンの圧力 P 機能や E (専門性) 機能がプラ

スに働き、反対にキャプテンの M (集団維持) 機能がマイナスに働いている。監督・コーチの技術指導 P 機能や M (集団維持) 機能、キャプテンに準ずる人の技術指導 P 機能もマイナスに働いている。こうしたことから、部主脳型では、キャプテンの P 機能志向の強力なリーダーシップが部の強さを増大させ、その他の人の強力なリーダーシップは逆効果をもたらす傾向がみられる。

3) 部員内主脳型：表 14 から、全 65 要因で全分散の僅か約 24%しか説明しておらず、これら

表 13. 部主脳型における部の強さに影響する要因の重回帰分析（練習計画決定者を基準にして）

順位	要 因	単相関	標準偏 回帰係数	規定率
1	運動部のもつ威信の魅力	.38	.419	9.29
2	キャプテンのM機能	-.19	-.274	6.07
3	監督・コーチの技術指導P機能	-.04	-.189	4.18
4	キャプテンの圧力P機能	.05	.139	3.07
5	監督・コーチのR機能	.06	.137	3.04
6	監督・コーチのM機能	-.05	-.137	3.03
7	部員の個人的目標達成の媒体としての魅力	.04	.130	2.87
8	キャプテンのE機能	.09	.128	2.83
9	キャプテンに準ずる人の技術指導P機能	-.05	-.125	2.77
10	高校で所属した運動部の強さ	.15	.122	2.70
11	監督・コーチのE機能	.06	.113	2.51
12	キャプテンに準ずる人の圧力P機能	.07	.110	2.43
13	キャプテンの人間的魅力	.09	.106	2.35
14	中学で所属した運動部の強さ	.18	.105	2.33
全（64）要因の決定係数		.403		

表 14. 部員内主脳型における部の強さに影響する要因の重回帰分析（練習計画決定者を基準にして）

順位	要 因	単相関	標準偏 回帰係数	規定率
1	キャプテンを尊敬する程度	.09	.239	6.79
2	キャプテンに準ずる人のE機能	.08	.201	5.73
3	キャプテンと部員の親しさの程度	-.12	-.178	5.06
4	キャプテンのM機能	-.09	-.171	4.87
5	一週間の練習日数	.18	.140	3.98
6	キャプテンの技術指導P機能	.05	.139	3.96
7	高校での運動部経験の有無	.14	.129	3.68
8	高校で所属した運動部の強さ	.14	.124	3.53
9	運動部のもつ威信の魅力	.12	.117	3.32
10	キャプテンに準ずる人のR機能	-.01	-.107	3.05
11	監督に希望する専門的知識	.08	.096	2.74
12	上級生を尊敬する程度	-.05	-.092	2.62
13	監督・コーチのR機能	-.13	-.083	2.36
14	監督・コーチの圧力P機能	.03	.080	2.26
全（65）要因の決定係数		.237		

の要因は、強さと大きくは関係していないと考えられる。そうしたことを前提にこの資料の範囲内で、出ている結果を考察すると、最も強く関係している要因は、キャプテンを尊敬する程度、ついでキャプテンに準ずる人のE機能で、

キャプテンと部員の親しさやM機能はマイナスに働いている。強い部（強さ5）がなく、弱い部（強さ2）の多い部員内主脳型では、緊張した人間関係の下で、キャプテンや上級生を中心とした部の運営が強さを増大させる要因をな

すと考えられる。

結 論

本研究の目的は、強さに影響する要因を探るため、ラグビー部における戦績での強さからみた権限構造や集団魅力等を検討し、強い運動部の実態を明らかにするとともに、生産性—魅力理論がラグビー部においても妥当するかどうかを検討することである。全国の大学ラグビーチーム 100 部、合計 3,010 名を対象に、無記名による質問紙法で調査し検討した結果、次の結論を得た。

1. 権限構造型からみると強いラグビー部は、部員外型、部主脳型で多く、部員内主脳型、部員型では少ない傾向がみられる。

2. 強いラグビー部ほど、中学・高校の運動部経験者が多く、その経験期間も長く、また強い運動部に所属し、キャプテン経験者も多い。特に高校時代のラグビー経験者が極めて多く、しかも優秀選手であったと思われる人が多い。

3. 強いラグビー部ほど練習日数が多く、個人の練習参加率も高い傾向がみられる。しかし、練習法の工夫によっては、練習日数や練習参加率と強さとの関係は、変えられる可能性がある。

4. 約 20 年前と比べると、現在の運動部員は、個人中心にものごとを認知する傾向が高いと考えられる。

5. ラグビー部においても、戦績における強さと集団魅力は相互依存の関係にあり、生産性—魅力理論を肯定する結果が得られたと考えられる。

6. 権限構造別に強さを規定する要因をみると、部員外型では部の威信の魅力が最も強く、弱い部ほど監督・コーチの強い指導性がみられる。部主脳型でも部の威信の魅力が強く、概してキャプテンの performance 機能と関係した強力な指導性が部の強さの増大に働く。部員内主脳型では、ここでとり上げた以外の要因の影響の方が大きいと考えられる。

謝辞：本研究を進めるにあたって、多大の御協力をい

ただいた全国の大学ラグビー部の監督・コーチおよび部員の皆様に感謝いたします。また統計処理にあたっては、終始御助力いただいた長澤邦子氏、種村紀代子氏に深甚の謝意を表します。

注

注 1) 丹羽ら¹⁹⁾は、PM 式リーダーシップ調査を 123 チーム、2,100 名の大学男女学生に実施し、因子分析した結果、集団維持 (M) 機能、圧力 P 機能、技術指導 P 機能の 3 因子を抽出した。本研究でもそれらの PM 式リーダーシップ機能が調査されているので、それらの名称を使用している。

文献 (References)

- 1) 阿江美恵子 (1985) 集団凝集性と集団志向の関係、および集団凝集性の試合成績への効果。体育学研究 29: 315—323.
- 2) 阿江美恵子 (1987) スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究。体育学研究 32: 117—125.
- 3) 岩原信九郎 (1963) 新しい教育・心理統計, ノンパラメトリック法 (6 版)。日本文化科学社: 東京, pp. 110—113.
- 4) 小山 哲・猪俣公宏・武田 徹 (1980) テニスプレイヤーの競技不安について。スポーツ心理学研究 7(1): 1—7.
- 5) 松田岩男他 (1980) スポーツ選手の心理的適性に関する研究, 第 1 報, 第 2 報。昭和 55 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, pp. 1—76.
- 6) 松田岩男他 (1981) スポーツ選手の心理的適性に関する研究, 第 3 報。昭和 56 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, pp. 1—39.
- 7) 丹羽劭昭 (1966) 運動集団の構造と機能。奈良女子大学文学会研究年報 9: 93—115.
- 8) 丹羽劭昭 (1972) スポーツ集団の研究。大段員美・竹内京一・丹羽劭昭 編 体育集団の研究。タイムス: 大阪, pp. 243—458.
- 9) 丹羽劭昭 (1972) 運動部の集団魅力調査項目の作成。大段員美・竹内京一・丹羽劭昭 編 体育集団の研究。タイムス: 大阪, pp. 359—370.
- 10) 丹羽劭昭 (1972) 集団魅力からみた運動部の凝集性。大段員美・竹内京一・丹羽劭昭 編 体育集団の研究。タイムス: 大阪, pp. 335—358.
- 11) 丹羽劭昭 (1976) 運動集団の構造と機能。松田岩男 編 運動心理学入門。大修館: 東京, pp. 213—223.
- 12) 丹羽劭昭 (1978) 大学における運動部員の集団魅力の変化について。スポーツ心理学研究 4(1): 49—57.
- 13) 丹羽劭昭 (1980) 体育・スポーツにおける小集団研究の動向。体育の科学 10: 708—713.

- 14) 丹羽劭昭・長沢邦子・北田明子(1985) 女子剣道選手の精神的適性. スポーツ教育学研究 4(2): 101-110.
- 15) 丹羽劭昭・長沢邦子・永井久美子・国枝和美(1986) なぎなた選手の心理的適性に関する検討(2). スポーツ心理学研究 12(1): 4-15.
- 16) 丹羽劭昭・長沢邦子(1987) あがりとパーソナリティ. スポーツ心理学研究 13(1): 7-16.
- 17) 丹羽劭昭・高柳茂美(1989) 「あがり」の心理・生理的徴候の2次元モデルの検討. スポーツ心理学研究 16(1): 6-15.
- 18) 丹羽劭昭・種村紀代子・長沢邦子(1989) 運動部の戦績を規定する集団の構造と機能. 体育・スポーツ社会学研究 8: 139-160.
- 19) 丹羽劭昭・種村紀代子・長沢邦子(1990) 運動部における権限構造とリーダーシップ. 体育・スポーツ社会学研究 9: 123-140.
- 20) 丹羽劭昭・岡 仁詩・長沢邦子・林昌一郎・蔦川 譲(1991) 人間関係からみたラグビー部の強さや権限構造. スポーツ教育学研究 10(2): 143-155.
- 21) 岡沢祥訓・猪俣公宏(1983) トップレベルの卓球選手の心理的適性に関する研究. 名古屋大学総合保健体育科学センター, 総合保健体育科学 6(1): 81-89.
- 22) Schachter, S., Ellertson, N, McBride, D. and Gregory, D. (1951) An experimental study of cohesiveness and productivity. Human Relations 4: 229-238.
- 23) 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄, 他(1986) 競技不安の形成・変容過程と不安解消へのバイオフィードバック適用の効果の研究. 昭和60年度文部省科学研究費(一般研究C) 研究結果報告書, pp. 1-136.

(平成3年1月8日受付)